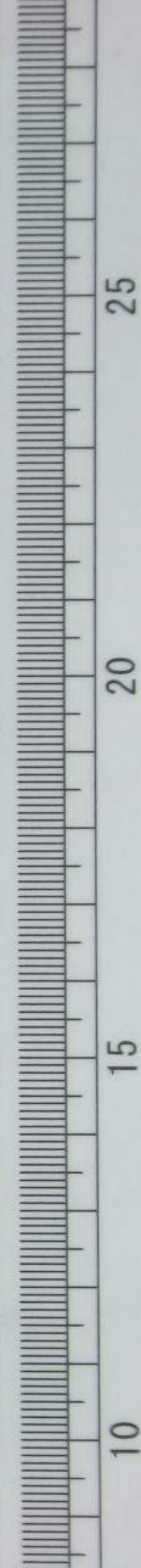




柳田文庫  
文庫11  
A 98



轉二堂藍泉編輯

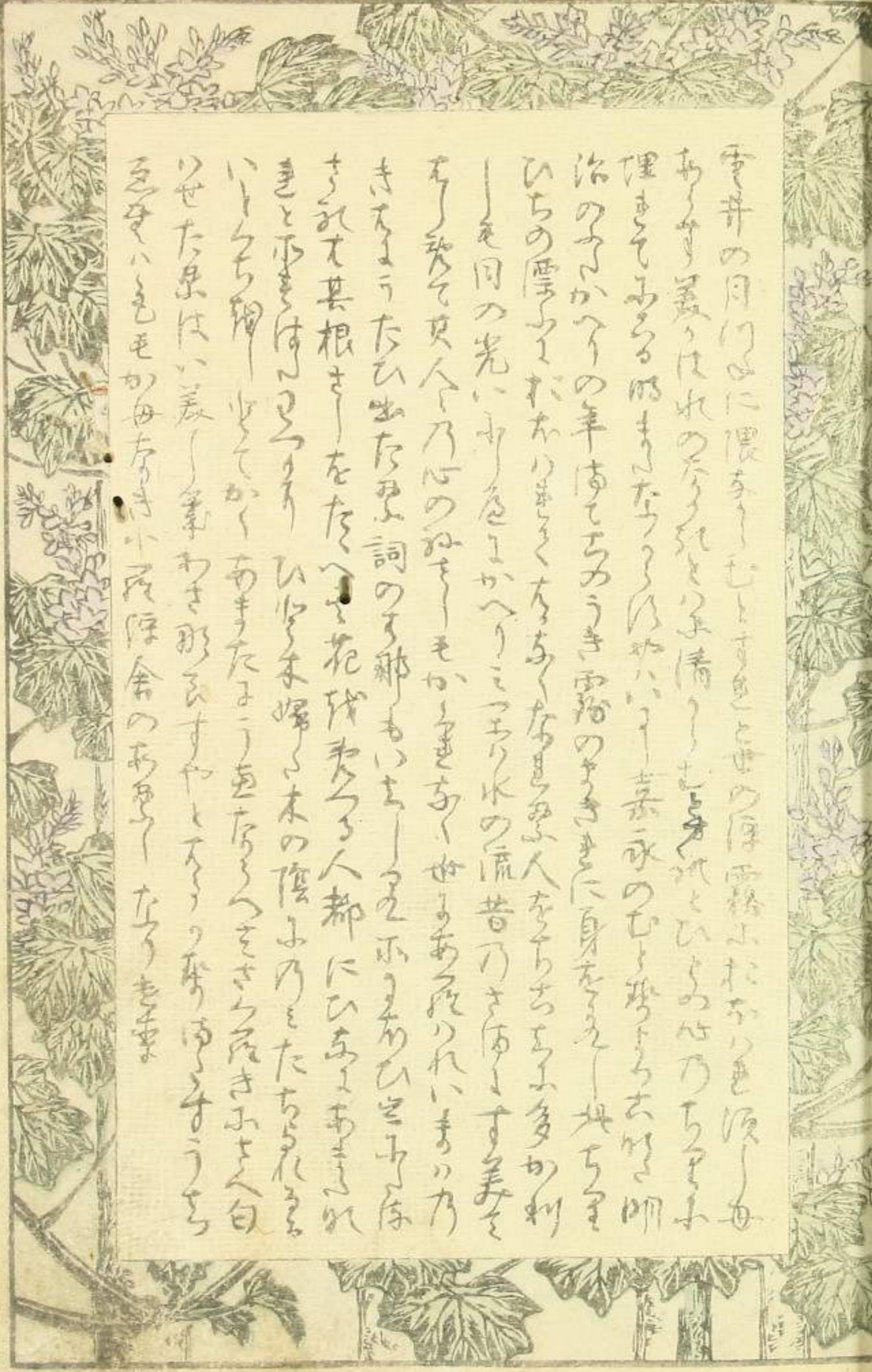
# 近世報國百人譜

鮮齋永濯 畫圖  
孟齋芳虎

福藏書

柳田泉文

吾井の月門心に隈まゝむとす色と世の厚雨松ふたかり色原も  
 あくす美くはれのをうれとよ清くも身試とひも心乃ちちも小  
 理ももあるぬもなううのゆかばい一素永のむとあうらふと  
 治のなかへりの年ほてちめうき雨路のまきまに身ををえ一母ちま  
 ひちの厚まうむかりきくをなくなまも人なをりちちふ多かり  
 一を同の光いゆり色まかへりこつち水の流れ昔乃さゆす美を  
 ちり秀て尺人乃心のぬきもかききあく世もあれりれいまり乃  
 きてるようたひ出たお詞のち那もいち一うふりまひひさし存  
 されて其根き一をたへも花残あつる人都にひあふあまはれ  
 きと心まはれりもりいゆな峰の木の陰ふりもたちたれも  
 いとちち柳少てかくあまたまうあなうへささう路まふま白  
 いせたまはは美一氣あき那良すやとるうりあゆまうち  
 三やハも毛切母あす小段厚舎のあまうなうもま



孝明天皇の御宇文久三年

三月七日大將軍徳川家茂公

登京ありて始て参朝

せらるる小三代將軍

家光公上洛の例よ

做り諸民小黄金六万

三千圓を賜ひて大りの

洛中と賑ひを此時大小の

諸族悉く京師小出て

懐夷と議をよろしく洛中

の雜習大くあらず其

家隸下々の者よあひひり

遠く洛外又旅宿する小

至るや廣き都の内

錐と立ちの地もあらず

時は嵐山の花盛

ある小會一繁

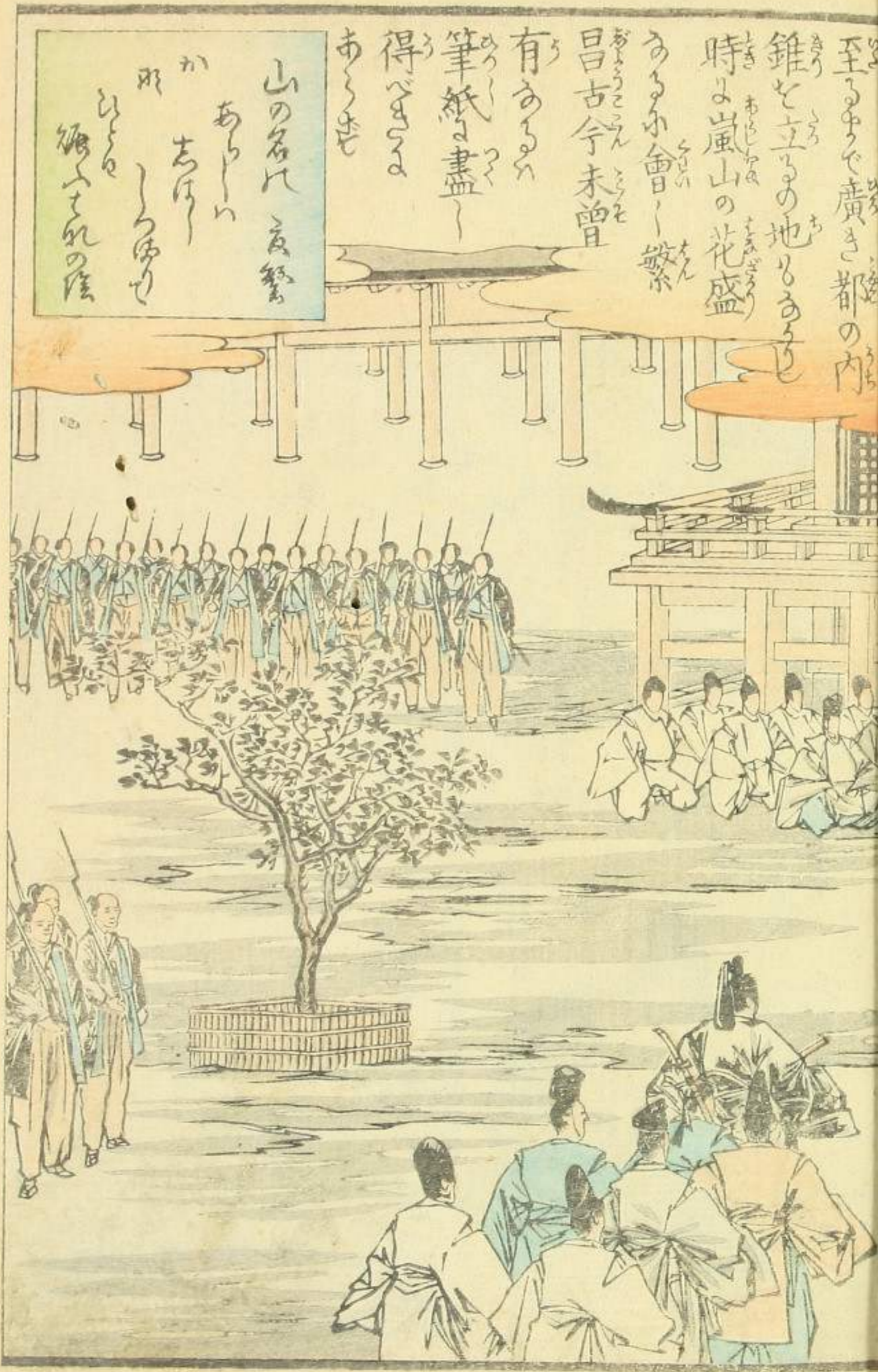
昌古今未曾

有ある

筆紙盡

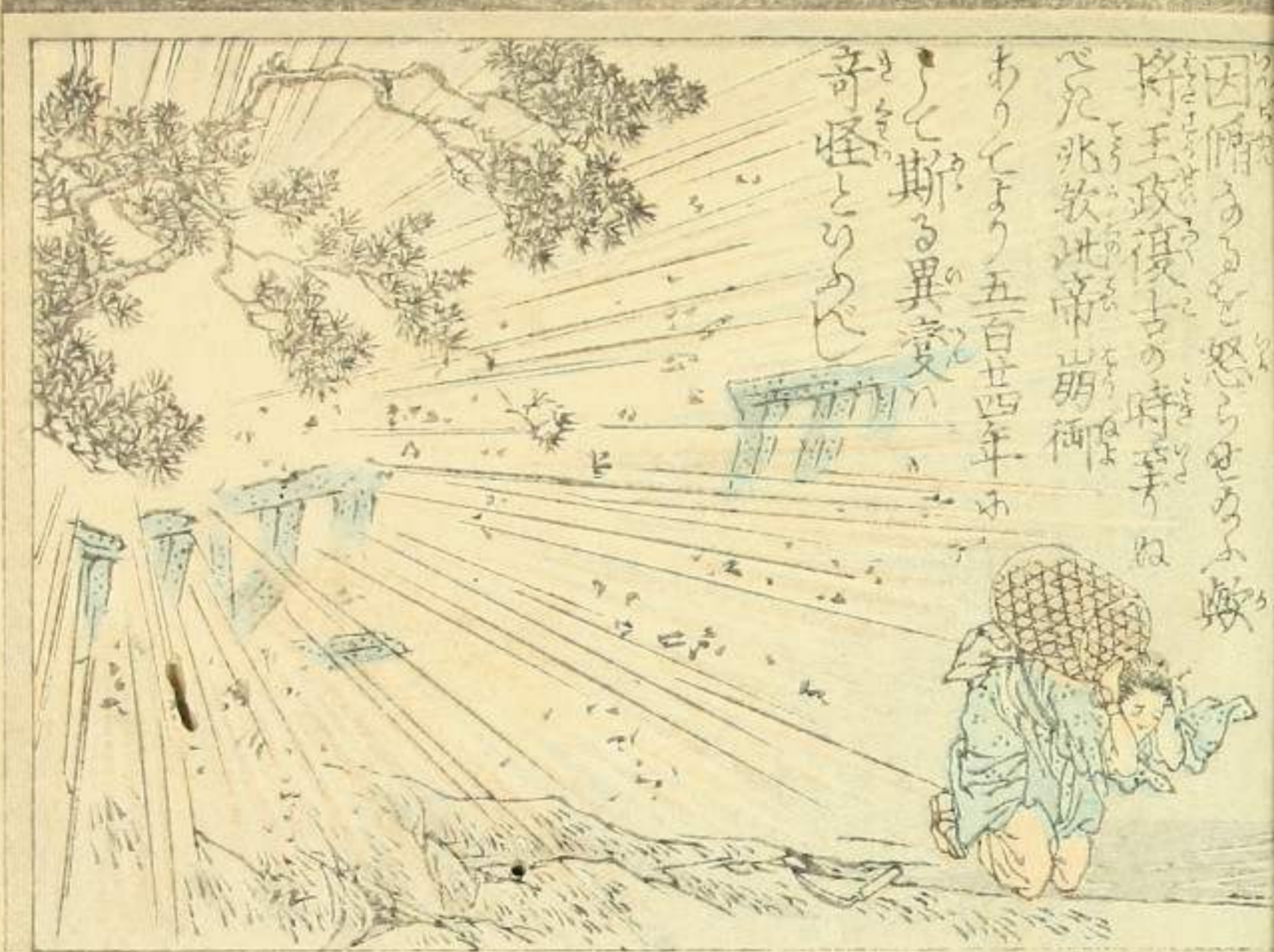
得べき

あはせ



山の名れ 文久  
あり  
か 志  
所 しくあり  
ゆる  
ゆる





因幡あるを怒らせし女  
 将王政復古の時奉ぬ  
 べん兆致此帝崩御  
 ありてより五百廿四年の  
 奇怪とありぬ



後醍醐天皇北條氏と謀り怒らせ  
 王弘弘三年五月廿三日始て兵を舟の  
 上より擧王ひより新田捕名和見島の  
 四公官軍に従うて盡力北條高時  
 と誅して後又足利尊氏と戦ふの際  
 勲功牧奉る小遣ありて  
 實小勤王無二の忠臣  
 と稱せし世の人の知る  
 處あり而して文久元年  
 十月七日大和の國芳野  
 山ある後醍醐天皇の  
 御廟忽然と震動はるる  
 數時して遂に破  
 裂する是則幕府  
 権勢と恣りて  
 寢夷の軍義



名和長年  
 天の日のせ  
 なる船の上  
 新納忠房



小島高徳  
 八田知紀



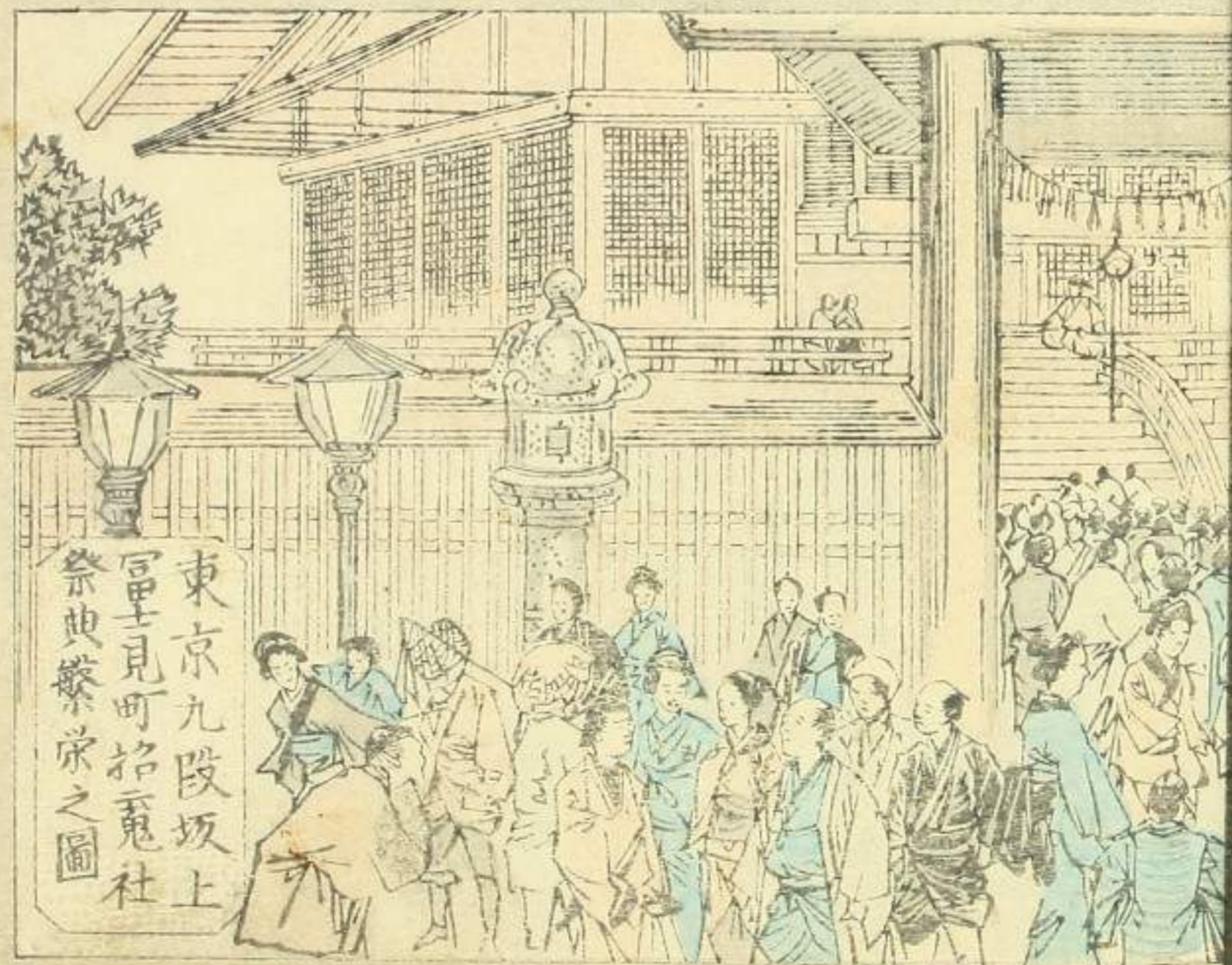
楠正成  
 足代弘訓  
 千早振  
 神代まさるぬ



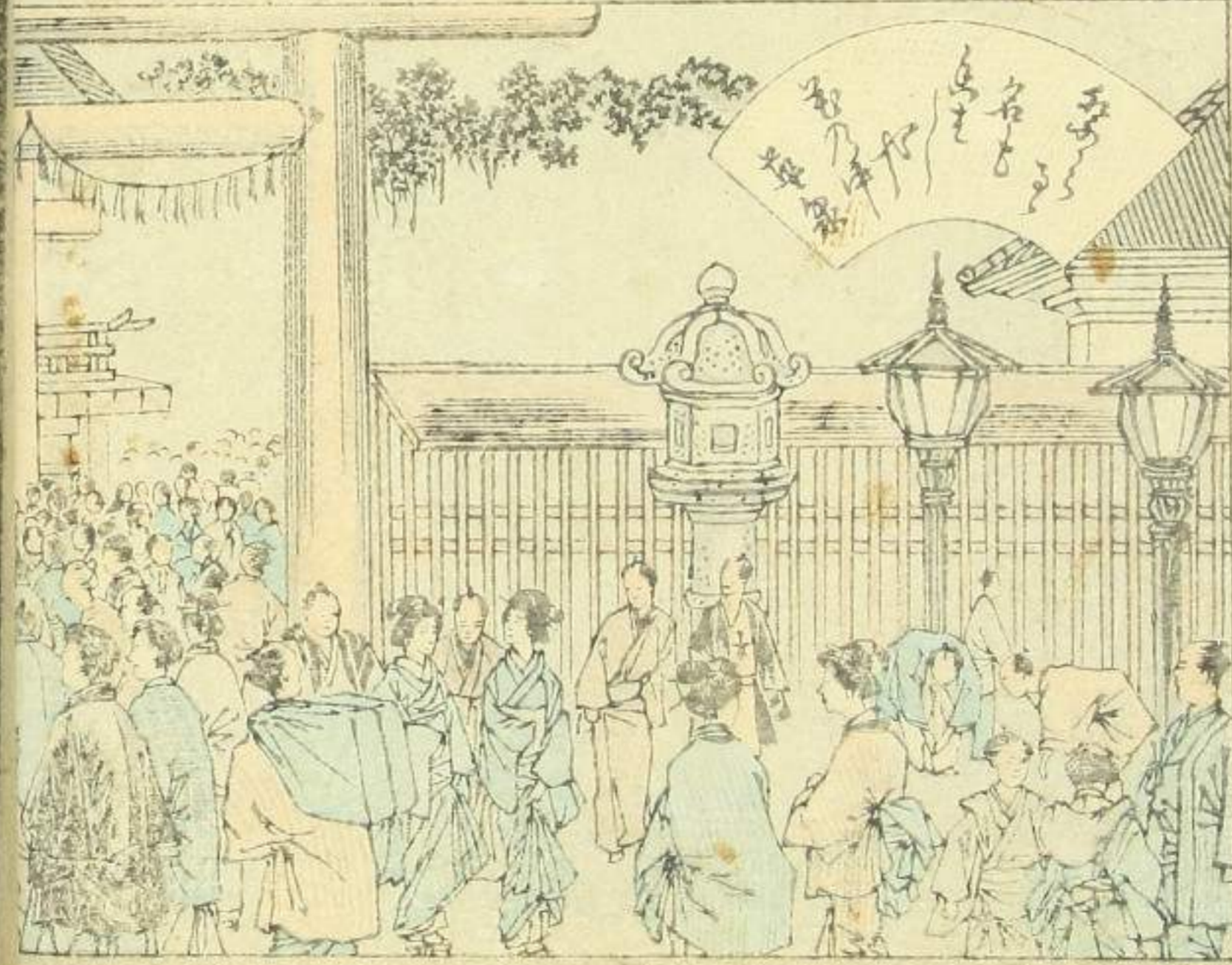
新田義貞  
 中島  
 廣定

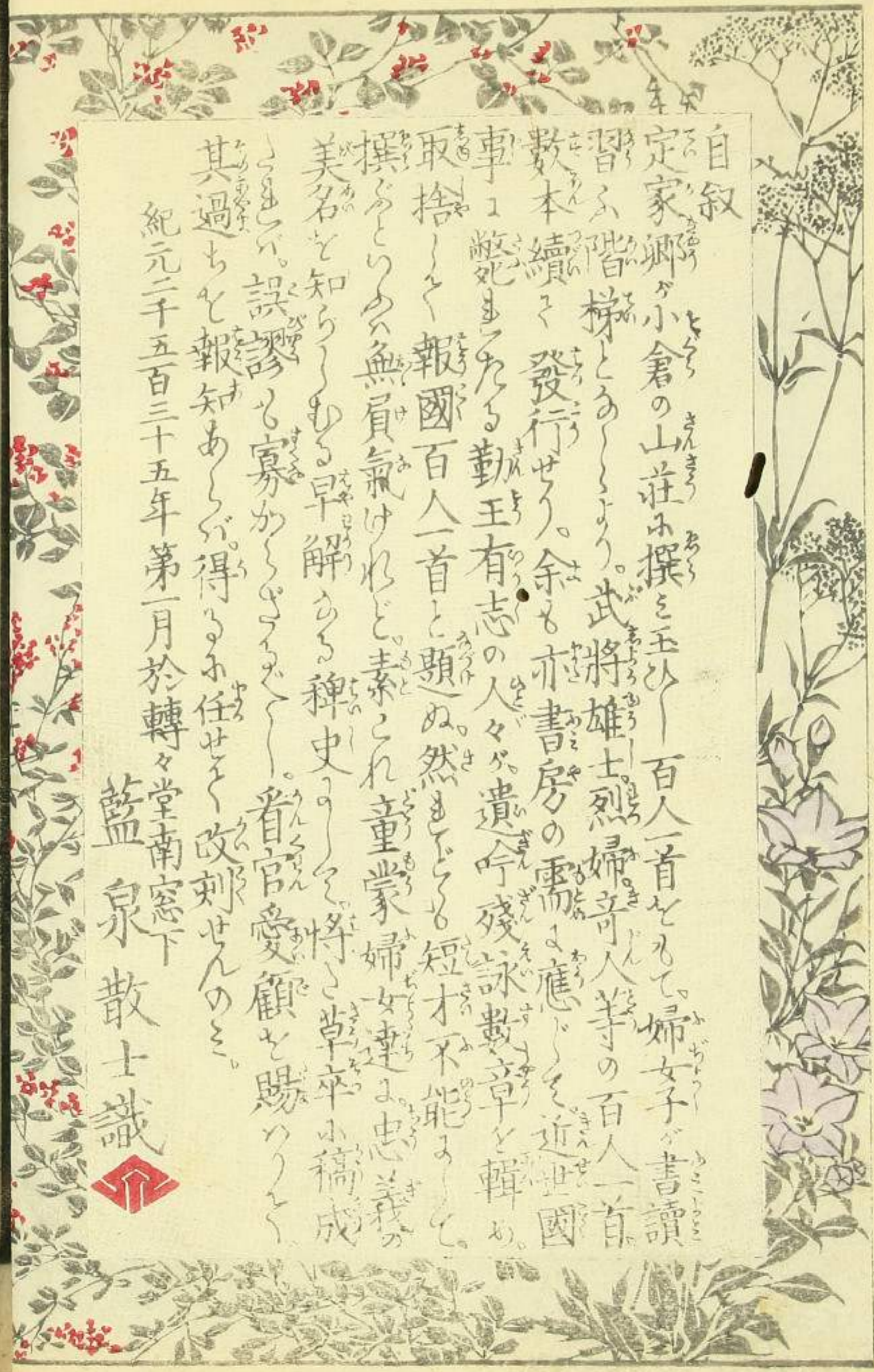


明治五年  
戊辰正月  
四日鳥羽伏  
見軍の  
圖



東京九段坂上  
皇土見町招魂社  
祭典繁栄之圖





自叙

定家卿小倉の山莊に撰と玉ひ百人一首をもて婦女子が書讀  
習ふ階梯とありしより武將雄士烈婦奇人等の百人一首  
數本續々發行せり。余も亦書房の需に應じて近世國  
事ニ弊多かりし勤王有志の人々遺吟殘詠數章を輯め  
取捨し之を報國百人一首と題ぬ然も短才不能よし  
撰る所の無負氣けれども素これ童蒙婦女連は忠義の  
美名を知らしむる早解ふる稗史より將と草卒小稿成  
其過ちを報知あはれ得るに任せり改刻せんものと  
紀元二千五百三十五年第一月於轉々堂南窓下

藍泉散士識

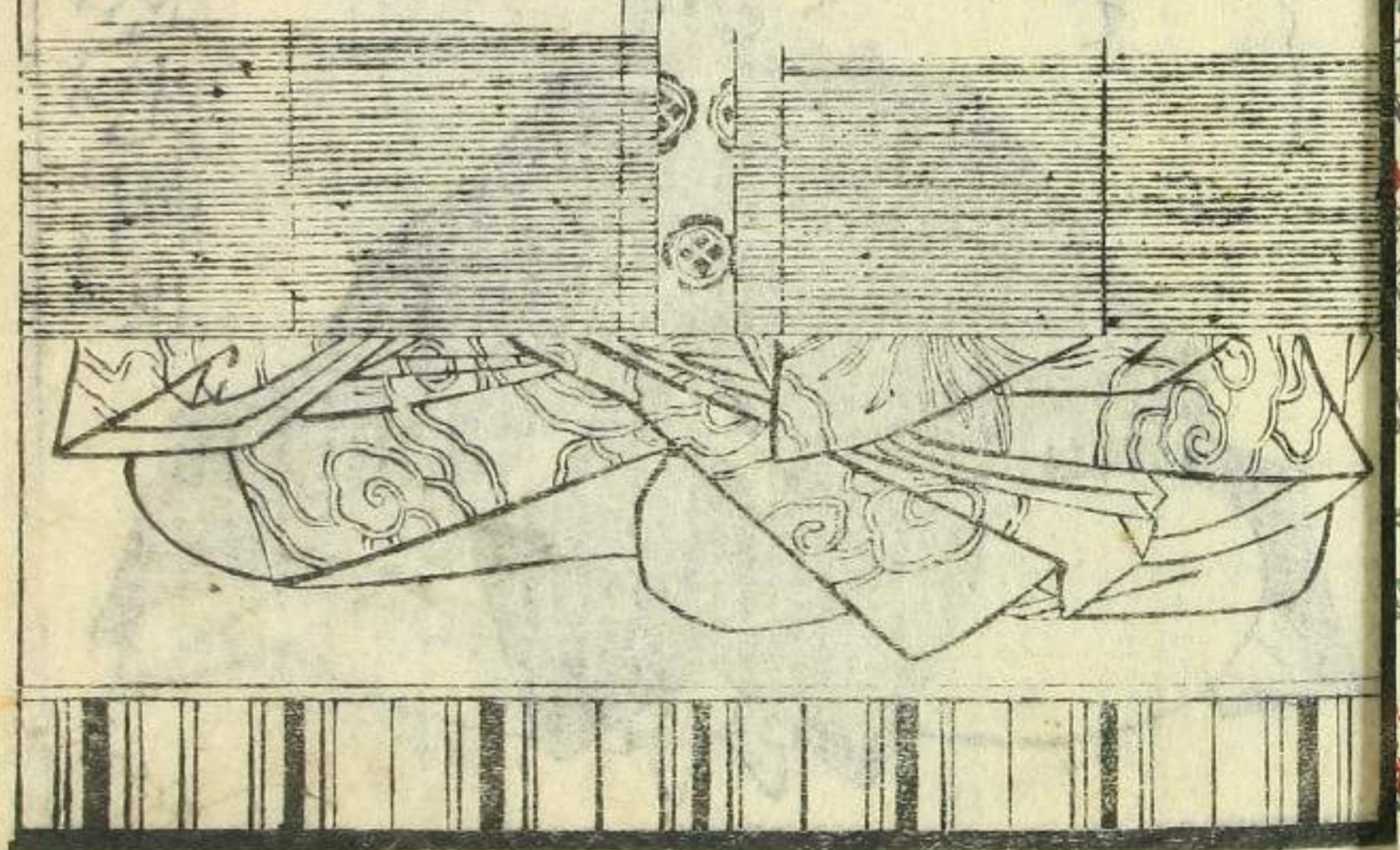
孝明天皇

ぬと玉の  
よのけがら  
冬の寒き  
うそ

つれづれ

國民

のよと



孝明天皇ハ入皇百廿二代の帝  
御諱と統仁と申則當今の御父  
帝ハ在位廿年間國事多端  
而て常不冠内患不震襟と  
惱まを為不請候と召て建議せ  
しめ給ハ皇政復古の基と起  
給ハ長州の増田國司ら宮門  
迫り時の御製  
戈とて守と武士と人の  
もりの操風とてくちり  
ぬと玉の御製ハ延喜の聖王  
寒衣子御衣と脱玉ひ  
の事ハ長門守として其人民を  
の御給ハ聖慮深く可仰也  
慶應三年十二月廿九日崩御室  
算三十七ちち七五よ

長門守一

中山忠光朝臣の壯年より  
先帝小旣近奉り攘夷論  
と奉りて一度朝議の巡巡と  
憤り藤本鐵石を同く  
一黨となす天誅組と稱し  
五條の縣令と暴殺し威を  
大和よりひが詔藩の兵を  
破らして遂に其大志の成り  
さうを憤て此歌はよまれ  
たると傳へたり

福原越後の毛利家の  
の老臣あり元治甲子  
關下暴動の時伏見  
みある五百余騎を從  
へて嵯峨山寄の兵よ  
應むんと深草に至る  
の途中大垣の兵の謀計  
よわらう大に破れて後  
本國まで屠服を

中山侍從忠光朝臣



あまの  
の門  
とほよむ  
思ひくち  
あし

福原元佃



福原元佃  
我此の夕  
す  
うてふ  
きん

長州の國老よして初名  
と彈正と云後左衛門  
佐と稱を元治元年甲子  
の七月十四日數百の兵士  
と卒て山崎より上京し  
禁闕暴発敗軍のち本  
藩より歸り同年十二月  
廿七日阿罪の師至る  
よのぞとて主家の難と  
とりんと慮り自ら罪  
を引て割服せり

薩州の藩士にして浪士平野  
次郎といひ一島津三郎  
上京の途はせまりて討幕  
の説と主張し城島伏見の  
駅より旅店寺田屋ふいせ  
大に闘つて死を乞ふ

益田親施



今さ  
何う  
や  
空  
彈の  
あまも

有馬新七



有馬新七  
大君  
は  
之  
時  
来



通称謙三郎号奎堂三洲  
 の浪士ありて天忠組の黨と  
 り文久三年九月大和五条  
 二兵を挙げ高取の城を襲  
 ひ数日ありて軍破れ  
 鈍石等と共に死の時  
 このを以て此歌いよとす  
 あり



松本衛  
 松風  
 後の  
 こま  
 つま  
 のり  
 まこと世の人よ

野乃宇都宮より戸田  
 の藩士にして俗称と強助  
 と云廉直の性質ありし  
 が各国の異船渡来せし  
 み及んで憤懣みなえず  
 尊攘の説ととてて捕  
 らるる文久元年酉年東  
 武傳馬町の囚獄中  
 病死す



兒島草臣  
 こころ  
 又  
 り  
 け  
 の  
 り  
 成り

三條殿の家士はしてよく  
君命を奉り国事を  
力して甲子の役長門の  
國を脱せんと船がアせ  
行長門の浦のあさまし  
をい夜なき寝のさび  
あすらむ又九月十三日  
の夜ふのひまひまや盛  
の八重路をこり来て  
後の今宵の月と見ん  
と云

討幕の論を起して京師  
不通りんとすは臨嶋  
津公其臣下ある奈良原  
喜八郎ふ論懇篤に説  
諭ふはむも伏従  
せしむあつて奈良原喜  
八郎大いより英断を以  
て主謀有馬小とにむ数  
名の浪士を切害せり新吾  
左工門も其徒あるとあり  
く茲に討死し及べし

丹羽出雲守正雄



あつて甲子の役長門の  
國を脱せんと船がアせ  
行長門の浦のあさまし  
をい夜なき寝のさび  
あすらむ又九月十三日  
の夜ふのひまひまや盛  
の八重路をこり来て  
後の今宵の月と見ん  
と云

森林山新吾左衛門



あつて甲子の役長門の  
國を脱せんと船がアせ  
行長門の浦のあさまし  
をい夜なき寝のさび  
あすらむ又九月十三日  
の夜ふのひまひまや盛  
の八重路をこり来て  
後の今宵の月と見ん  
と云

浪士拔扈して尊儀討幕  
 の儀みせたまはる時崎津公  
 の家士奈良原が為り  
 うくれ同盟十八人と  
 りお大またくうて終よ  
 伏見の駅ふ死す時ふ  
 文久二年四月廿三日あり

通称軍兵工といふ松平丹  
 波守の徒士より身卑  
 物れどもふく外夷と惡  
 藩君居留館東漸寺の  
 敬言衛と命せまると  
 憤りて英入くると云の  
 殺一タウイといふ創を  
 おもせて後小自殺る  
 遺虫の末よびるを虫  
 故を以て藩君の守衛と  
 免せらる

級國百人一首



西山直五郎

志と業の  
 志  
 聖  
 社  
 印  
 の  
 げ  
 も  
 ね  
 り



伊東徳英

社  
 風  
 と  
 何  
 ら  
 中  
 ら  
 ん  
 せ  
 ら  
 る  
 志  
 と  
 業  
 の  
 志  
 聖  
 社  
 印  
 の  
 げ  
 も  
 ね  
 り

杜太郎と稱し越後の  
 人あり閣老安藤信正  
 の外夷を親むと云ふ  
 一時豊原邦之介と變  
 名し同志と共に拒擊  
 して果さば文久二年の  
 正月十五日東京城乃  
 坂下門外に命とあ  
 せり

俗稱信濃と云長州の家  
 士あり元治の役蛤御門  
 一せちりて薩會二藩の  
 兵士と大いなる同年  
 十二月益田福原とも不  
 自裁すの丸鳥川の詠ハ  
 其辞せありときこえし

河本親忠

感慨男兒  
 不思想家  
 悲時心緒  
 乱如麻  
 風雲豈莫相  
 逢日潜匿唯  
 須待斬蛇



國司朝相

死名門  
 其の  
 中乃  
 流ふく月を象す水のなり



但馬の人やて俗称と左  
右雄と云元治甲子の春  
教輩の浪士と共に等持  
院ありは三将の末像  
の首と斫て三河河原は  
兼一足利氏の凶暴と唱  
へて徳川氏に擬せり以  
て追捕のさきえられだ  
二月廿七日自殺せり  
とぞ

通稱富次郎と云水  
戸家の藩士あり文  
久三年の秋和州五茶  
の一撃敗軍の後とら  
へられ渥美波谷等と  
ひとしく刑死す

仙石真雄



のや鬼のつらみの  
浦より脱む

免を  
於の  
とぞ

岡見恒成



武士の  
やまの  
あつ  
操む

玉比麻小  
らふ

俗称十郎と云和名の  
 産あり天忠黨の義拳  
 大の憤発して救日のお  
 苦戦及びび一十津  
 川におかそ生捕られ翌  
 年二月刑ふつをりいま  
 一の繩の歌い獄中  
 の遺吟ありとを

日向の國延慈眼寺  
 の住職あり常小愛國の  
 志深く尊攘の論は主  
 張して捕られ京都にお  
 いて禁固中卒死す時  
 一慶應元乙丑の四月  
 十七日行年四十六あり  
 りと

乾 縦 龍



僧 胤 康



元治元年二月廿六日大坂  
 御堂前より自殺を其謂い  
 薩摩の豪商大谷仲之進  
 外国と交易して浪華よ  
 り長崎よりこの途中  
 長州別府浦に碇泊せし  
 時秋の同藩士と志士  
 のコレ仲之進を斬り其  
 首と反地を暴す是外  
 國人を忌む最も甚き  
 のあり朝正通称誠一  
 郎と云

藤田の水戸藩は小四郎と  
 称し虎之助虎の子之丸  
 武田と似る操夷を称す兵  
 や起る其處父彪國政  
 を改革せんと結城虎寿  
 之と悦び侍て正奸両黨  
 と分離し相闘くと数年  
 ついに其余黨を倒さんと  
 志す此奉小至る幕兵と  
 戦て勇とあふむとある  
 といされども衆寡敵せ  
 ず武田と共に衰賀よ  
 刑せらる

山本朝正

あめうせ  
雨風小

ちのとも

のや

よき

花

君りくめよ

何うと

こし



藤田信

このふの

ふひ

あ

たる

将

ひ死つめ

何とゆめ



伊賀守と稱し名と正生と  
云一号と如雲といふ烈公に  
任つて文武まこと守り其家  
信玄の後裔ありと自称し  
藩中服するもの少なきは  
つ小同藩市川朝東と  
相化其儀棟夷論を王長  
兵とあはし屢水戸にまゐり  
太平山に屯し筑波より  
後西京に赴て妻情を幕  
府に訴んとて事警は  
金沢の陣よりて哀を  
こゝ幕府ゆるぎをの

黨を尽しと敦賀に刑  
せり  
妾とて女又志操ありて  
正生家と出戦ひふ起き  
一日も側をなまじ  
且らうらう走り長  
途といふをいへと従ひ  
感あるにあたり何ぞ  
正生刑せらるるにけり  
この一首を詠し死す  
あ正生あつて此と死す  
あり豈良偶といふる  
べんや

武田耕雲社



先天下  
後天  
神話よふひそ  
鏡の  
つるうらた白登

武田耕雲社



かひて  
身は  
夢の  
あつて  
白ひて  
ちんえ  
のね



内藏分ハ水戸藩に

武田黨の一人

幕府の攘夷論

ありそそと憤て

一首と詠き

刑よりつるの日又

刑よりつる

原内蔵次

多しのわく

あつらひ

さ海

山城の

たつとく

さげら



梅田定明

君の代

あふ

ろの

秋身

あふいざり



源次郎と云若州の人  
嶺南社を師して学び  
安政元年九月曾西  
の船大坂より一時大和  
十津川の豪士ホと謀  
つて異船を襲撃ま  
さんときるにこる  
その後水府の吏に  
さして以て同六年逮捕  
せし江戶小倉侯の邸  
内囚りて中病死す

安政三年七月十九日米  
國の使節ハリスス豆及  
下田未つて兩國交際  
のとを解き其返翰を  
促す時小幕守九段  
坂下ニ蕃所調處成  
開きて茲ニハリスを  
居りむろを以て同  
年十一月十六日同志三  
名の上にも去る所へ  
忍び入ルリスを刺ん  
と欲しと拘られ江戸  
の獄中ニ死す

水戸家の國老武田伊  
賀守が家臣に  
愛國の志深く用港  
の沙汰を憤りて信田  
堀江両士とあめ合せ  
米使をさんと深夜  
蕃所調處ふ去のび  
幕史にさへ  
とて戊午の春江戸傳  
馬町の獄中ニ死去す  
享年二十六才あり

信田仁十齋



大君の  
才を  
あつた  
と  
妙の才を  
あまふ人殺す  
いふことせられ

蓮田後花



あつた  
た  
我は  
道ハ  
男の

俗稱新十郎 名緯字六  
 公園真逸 詩禪星巖  
 木の救号あり美濃の人  
 にして若年江戸に出て  
 山本北山の門に入り詩  
 と以て世に鳴る星巖  
 詩集同遺稿亦に聞  
 へる佳作救詩あり  
 晩年平安に在て煉慨  
 のあまり憤死す時り  
 行年七十その妻紅  
 蘭も詩画も名あり



やまがのせい  
 梁川星巖

先の  
 牙は

終る  
 命は

せよいさぢの  
 世よ

あはれぞうけし

幕議因循して権夷遠  
 去ると憤り同藩轉飼女  
 島ホとらんとて勅と受  
 一妻移して大老井伊中  
 將大い小狭き間始下  
 を京師よのせせ是ホの  
 変件不係る公をと幽閉  
 一其れ救十人と結し  
 各刑に處せられたる  
 伊与之少も同盟の中に  
 て戊午の八月江戸り  
 死せり



ちねいのまけ  
 菅根保赤之助

あまはれ

心は

けの

けの

あまはれ

頼三樹三郎名の醇字八平  
 春又吉狂生と号し美濃の  
 人として山陽表が末子人山  
 陽者て京師三本樹は寓居  
 する内生ると以て三樹の名あ  
 りて振夷の吏に囚はれて以て  
 捕縛せられたるが死に死  
 止む遂に斬る年三十五



正實の太郎と稱して  
 筑前の浪士と長州  
 國司以下の京戦小管  
 たるを以て殿后の  
 長守は阿久平野國臣  
 か刑をうけてとさう  
 月照が墓よりうる哥と  
 めひいて此一首と



弘へ深蔵と稱し七筑前  
藩に漢字に長ト字  
と伯重と云ひ号と倚巖  
と稱ふ國吏とられり  
まゝ方懐慨家々藩  
これと忍て幽閉を諱  
多し今その一律中の  
と掲ぐ

横濱岩亀楼の喜遊  
江戸の医師太田正庵の女  
るハオのをり吉原甲子  
よ抱へるは十五才の時  
子の日と呼はるる故あ  
岩亀楼へ住替とまり港  
中第一等の全盛あり  
以て五人イルス小娘  
大金と抱て壁と甘と挑む  
樓主も屏を説諭し勸む  
止と不得兼諾して其夜  
又も伏て終りぬ書置の  
日本魂あるに似たり末  
のせり

月形弘

海家藩  
学有  
淵源  
百載寧  
富考春



娼妓喜遊

倭の女



ある  
め  
神の娘

竹之助藤原の光明は  
 水戸の家臣にして饒勇を  
 以て世に知るる万延元年  
 三月三日同盟十八士と共に  
 井伊中将と討重傷と  
 あひたつたが老中股坂  
 侯の部より自訴し其夜  
 小至りて死し其豪  
 氣膽力 人を恐怖せし  
 むのあま清の故は着せし  
 志をなんし記し在しを

薩藩有村隼人の子に  
 して母ハ水戸の人ハ通称  
 次左門と云曾て攘夷を  
 唱へて水府の浪士と組  
 梅田の拳は短鎗を携て  
 番駕より頭も出井伊  
 中将の乗物と突き戸  
 を開て其首を斬凱哥  
 とあけて走て辰之口  
 のころ重傷の苦痛堪  
 ざるを以て屠腹を  
 岩子ののらふ所持の烟  
 管小彫付置しとて



佐野光明  
 名傳  
 孫乃  
 西麓  
 さまもの  
 身軍の  
 斜ともん



有村兼清  
 名傳  
 孫乃  
 西麓  
 さまもの  
 身軍の  
 斜ともん  
 玉安うれと  
 らちるるち刀

監物と云常及静宮の  
神職ありしが藩士救を  
もつて井伊中持と但  
撃し重傷を負ふる  
佐野黒沢蓮田ホと俱  
小坂坂使の邸ふりり  
同月八日死去せり監物  
が詩なりとそ人に贈  
灸する 胡馬南未久  
不帰云く清人某氏の  
作みて一徳が詩とす  
ハ大ひよとつへり



齋藤一徳

笑ひて

ちり

武士

道よ匂ふ

花よそありなる

水藩の馬廻り役を  
ほとめて廿一才の猛士  
あるが三月三日桜田  
の一件のぞと彦根  
の前駆の中に突入り  
喧嘩よとよせて衛士  
多勢と討ち杉山  
蓮田ホとひりり刑  
に處せりとたり



森五六奇

霧の

あつ

花の香

ちりよとせり

やかとおほし

横田麦作の義徒よ  
水戸家の大藩士  
あり撃戦功ありて后  
老中服坂中務大捕の  
郎より同黨の士  
こもぐ刑に死しん  
文久元年の秋は  
て其より廿六才

鯉淵要人の横田の  
拳に際し簑笠ふ  
かく躬をかじ敷訃  
の者に出さちて井伊  
中將が輿物りて進  
もより教の衛士也  
りてり何い功ありて  
後聖辛酉のち  
刑死しつたり



君のつれ  
身より

あまの  
名  
ま  
つ  
身  
あまの



輕洲鈴疎

霧と

國君の  
た  
あ  
身  
あまの



万延元年車申の三  
月上己の嘉儀を祝  
さんと掃部頭が登  
城を中あらけ討んと  
議する其時愛宕の  
山小會合して此歌を  
あつらひしと翌年  
刑死せしむる同藩  
の士と同日あり

常州水戸の鉄砲鋳  
治あり幕府の  
用達臈市十郎乃  
門人とあつて江戸に出  
桜田の奉會して  
其徒よ加つり果て  
熊本侯の藩邸にひ  
て翌年七月廿三日刑  
死す年三十九



名をひき  
おの  
園の夜ゆ  
あらしきりや  
廣園千江所

うまひ



杉山弥一  
水城  
君よ  
かき  
のれ

市五郎と称し寺社掛

なりしが同藩十八名と云

ろくろ万延庚申の三月三

日外さうぶ田小拔群の

働させし世の人の知処

あり兩して確老の郎は

至り初平年七月刑せし

れろり口ばら刑よのぞ

める因の辞せあり

俗稱を孫兵衛と云

水府の浪士あるこの

櫻田の戦場ふい出

會せざればどうもて

此一條は係りを以て

翌年同盟の士ホカ

刑せしむるの日俱

は江戸にあつて斬

せしむ

辰國百人一首

蓮田心実



金子教彦

玉成あひ

家

持

武志

名残惜む

身とぶをゆま

多一郎といふ水府の士  
身は大坂に脱して島  
男也が家又潜るゝるに  
捕卒のとも向ふとさういふ  
父子等しく秋の坊は赴  
き尚薩州小遣れとす  
に更既二遍つて成るを  
知小川某が家へ入て  
榎田の徒と同志の始末を  
うろり石碑建立のそと成  
るの遺金六十二圓と出  
し父子ともみ又伏  
せり

多一郎が二子ありて父を  
ら小川崎孫四郎と  
俱小大坂に於て自截す  
時、庚申三月廿三日  
此人曾て作る処の詩  
多く慷慨悲壯あるを  
以て其志と知るに足れ  
全救篇の中一首と  
下は掲ぐ

坂田百人一首

高橋愛緒  
このまじろを  
淋！  
かきせ  
よふ  
よりの  
多みごまのる  
祢豆の束のひ



兵錦織成世路難  
憶君不耐涙  
潜々  
踣踏  
郎外  
月明夜  
偏照行人腸裏寒



江戸神田明神下辺る  
烟草屋の娘めて頗れ  
姿色ありうて榎田美  
黨の一個る関矢之助が  
外妾とて三月三日の更  
件を聞つて他更のよ  
そて親戚の家より  
暇も一菩提所へ赴き  
自殺を商家せらるる  
烈婦といふ

通称吉左衛門と云水府  
の家士とて言師の留守  
居役もしが報國尽忠  
の公卿方とせらる  
勅書をつと密に江戸  
小在まに老侯の許へ送り  
る故を以て安政五月  
江戸に召られ其子幸吉  
と共に刑死す



関氏妾流  
ちる花の  
指てるもの  
時考  
法の  
はる  
秋とて  
わが



物銅邦度  
物と緞ん  
正徳やん  
屋分も  
山  
る

いせんさうしや、いんせきやう  
 夷船掃攘のあり一橋刑部  
 卿と嗣君の元と皇方力を  
 尽し小村及び官女村  
 岡本と右の勅使と戸  
 下せしと発覚して  
 召とりとて終り死  
 刑よりつゆり  
 見えであくのあは  
 此せりの辨せありと

江戸の書生中て俗称を  
 五郎といふ浪士清川八郎  
 小とよお尊攘のこと成  
 ころそ京師よのほつて  
 天忠組の黨に加り五  
 条の乱に捕りれて元治  
 元年二月十八日十九人の  
 同士と共に刑せらる時  
 二年三十七あり

報國百人一首



ちゆせん 藩前の藩士野村新三郎  
の妻をとりてと稱し尊王  
の志ありけり烈婦ありけ  
るに幕府の嫌忌ふらふ  
とありて乙丑の十二月姫鶴  
に配流され了卯の春脱  
島して同年十月六日閩防  
の国に終る時六十二才  
也。玉といふの歌は大橋訥  
庵の妻牧子と夢路の日  
記を見てと以前父  
あり

俗稱と助作といふ曾て  
尊攘の議と謀りて祖  
母望東尼ホとともりり  
本藩みとらりれ了卯の  
年囚獄中ふ死去せり  
○浮雲のうたに辞世か  
りといふ

望東尼  
玉といふ  
たの中  
くさけて  
おえり  
ふあま  
とくまのつらさ  
の  
の  
やういふと



野村定省  
うたを  
まご  
しり  
やらぬ  
月あま  
るの  
世に  
つる  
せいの



伊与作と称して常陸の  
 国下館の藩士より天忠  
 組の黨ふ入て五糸の戦  
 争に敗北し十津川ふ  
 おろく橋とありけるとき  
 ○ありゆき枯野乃  
 露とさえぬとも魂の雲  
 井あり明の月斯く  
 翌年二月斬ふ處せら  
 れり



姓大中臣俗称七次郎云  
 攘夷の志とがんと杉骨  
 碎身一僧月照と西海と  
 脱一才と潜め佐木將監  
 と変名して文久二年四月  
 同士の浪士とつらそ島津  
 侯一教弥一後生野原  
 捕首て刑死す獄ありあ  
 日梅の二枚とて  
 板のむらるといふと  
 うらしまあはるり



板國百人一首

備前の人より俗雑  
津之公とて不尊攘と唱  
へく中山侍従は随ひ  
大和の一挙利ありして  
遂は十津川よりち死  
せり嘗て鉄石と号し  
て南洲画は長ドま  
詩文心もききたあ  
其画と侍従との何り  
筆力勁秀風顔あり  
る



鷹司家譜代の家士は  
て水府の妻は係り勅書  
扱ひにより安政己未の  
秋遠き鳥がねは流  
病死す獄中あり時目下  
部信政は谷の哥とて  
○あまの浦は妻やあま  
の何玉の浦は妻やあま  
○あまの浦は妻やあま  
あまの浦は妻やあま  
あまの浦は妻やあま  
あまの浦は妻やあま  
あまの浦は妻やあま







水戸藩より武田正生  
と共に久戦ひ久走て  
越前へ出進んで京師  
へ入らんとて金沢福岡  
會津以下の兵にせめ  
らるるに武田とても  
金沢の陣より哀れ  
と幕府の兵將思  
ひに武田とても  
遂に敦賀に刑せらる  
死ふつく日つぎさつ  
狂ふとほる

伊東祐之ハ丹州  
の人よりて竜太郎  
と稱し、劔法よ長ト  
たり、攘夷の論を立  
て平野次郎ホの議  
小同ト生野の役を奮  
戦してついに捕とて  
京師にあらる、後幽閉  
とけは病死す

坂國百人一首



建部武彦の筑前

通称紫輔 号天山と  
の学業優長うへ  
又詩文ふたつを  
曾て古河精里と俱に  
坂地は下るる御終子  
百りて獄よつたる後  
病て死に

友家淳風

撫枕無眼  
呼若何  
関心東  
海晚来  
波中宵  
起祀離騷讀  
自古詞人



多慨

建部武彦

建部武彦の筑前  
の藩にけ長及の  
徒京師ゆ争戦  
をゆく日々に  
出くろくはと有り  
大神般系等と同  
く斬り所せら  
とと

欽君慷慨  
志將酬  
傷世悲時  
暫不休  
知得人間  
三寸舌  
欲寧六十有余州



後國百人一首

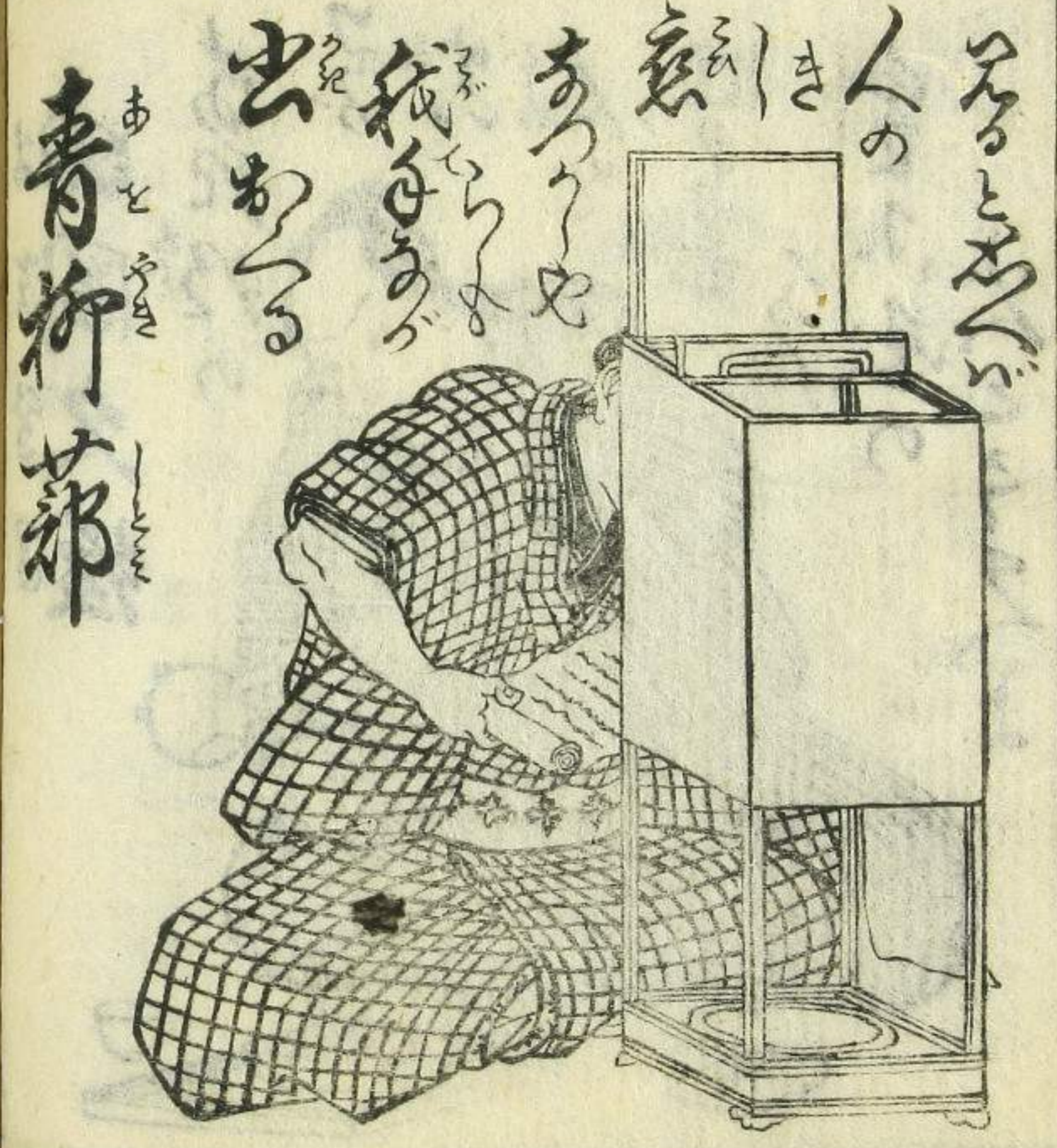
國分新太郎ハ水戸藩よりて武田耕雲社と俱り仲仙道より越前を経て都に入らんといく幕兵ふとくらる武田流城世ハ天狗組といひて以て戯まよこの句を作る

伊豫の人よと俊三郎とよ生野のぢぢと破ま後元治甲子の京戦ハ勢ひまきまり鷹司殿下の邸中に戦死を攘夷と主張するハ皇國人の本志とよむがたが皇國の人の人たるをばんとあ意あり

及國百人一首



對州の藩より内山右馬四郎の弟子之漢学にて長ト専ら攘夷と唱へて速近ニ遊説する時人々を驚かす城外の一村をよるに突然部を暗殺す是攘夷の端ニ合せざるの同藩より一時に年二十一才



大神敏系真ハ壹岐守と稱し筑前何某社の神職なり元治甲子の京戦ふうとあまのて本國ニ退き歸り獄ニ入りて翌年刑ニあつめぬははるる甲子ハ冬長州ニ同罪の戦小向ふときのことあり



伴林光平の六郎と  
 稱り大和五條の一筆  
 より高取の城をせめ  
 落さんと衆をぬきん  
 て戦ひし城兵もま  
 破らまると力の限を  
 中へにひし志後の大兵  
 小敗軍一とらるる成て  
 京師も斬る時五十一



伴林光平  
 はらたむ  
 お侍の  
 操も  
 うげ  
 堂ふりか  
 その、異州

通称を佐吉とり久  
 留米藩の一時  
 名を宮田半四郎や  
 変ト中山忠光の天誅  
 黨にらして大和  
 戦ひ戊辰の春伏水の  
 役ニ従事し身救  
 創を蒙り平らくの  
 后つひに死す



小門師人  
 名を  
 奉月  
 其の  
 おる  
 邦

大橋訥庵の頓藏と断  
 名の周造字と正順との  
 此年よりして尊振と唱へ  
 終小幕府の獄小なる  
 才弁漸く束縛をの  
 先て某候に預けられ  
 幽閉せらるる妻より  
 十月より病で死す妻  
 巻子又名と世小孫とい

訥庵の閣老安藤對  
 馬守を狙撃せしるの  
 主謀まりとて獄下  
 正のちゆらされて死す  
 妻その妻の獄あり  
 ありのちと孫して  
 夢路の日記といふま  
 歌文とよして才名業

# 大橋訥庵

生来兩度決必死

二十五年

又迎春

丹心

一斤斃死

再生又

掃大洋塵



# 大橋訥庵妻巻子

この心

くものる

魂のの束

九重の結

以階のめ糸

摺やゆの〜



戸田継明ハ卯橋と稱  
テ号セ公実と云秋月  
の藩ニシテ文久年中平  
野次郎ホト共ニ兵ヲ  
率テ生野銀山代  
官所ト討テ利あり  
比月ハ妙見山ニ戦  
死セ



戸田継明

卯橋

系

尾崎朝秀ハ物若  
工門と稱シテ長及の  
藩ニシテ元治甲子乃  
役ハ敗軍シテと  
とれとなり翌年本  
藩ハ屠腹ス



尾崎朝秀

卯橋



十兵工と稱し長次  
 の藩あり甲子の役に  
 従吏し後國に死を  
 露しるるの哥は皇  
 と唱へ却て汚名を受  
 しと詠する是をいひの  
 句を吟む  
 さきのぬるの  
 あじしもあるや  
 ぶざらう

通稱又兵衛彦名して  
 森喜八郎ともよみ長州  
 の藩にして元治元年の秋  
 京師ふたぐひ見王民部  
 赤と俱し蛤御門をゆかり  
 唐門よせんと銃丸あり  
 中り馬あり落て戦死せ  
 里下し掲る狂句は甲子  
 の元旦の誡筆ありと  
 也

万代常徳  
 今箱の  
 来島正久



今箱の  
 来島正久

今箱の  
 来島正久



今箱の  
 来島正久

水藩武田の徒して世俗  
 天狗黨と称す大平山  
 の戦ひ敗れてころころ八木  
 橋誠之進と愛名  
 慶應元年春三月越前  
 敦賀におおしく死しつは  
 り時二年二十六才あり



皇國の  
 前川隼人

越前の産はて雷名世に  
 裏き古今の字を究め  
 て和漢の虫悉く一俵せ  
 ざるは棲夷は苦意  
 して友人頼三橋とせり  
 将は為を延あんと  
 仍て捕縛せられ廿六才  
 ありて死しつありて囚  
 獄ありて資治通鑑を  
 誦しそ化佳作の絶句  
 多し

橋本九内  
 苦冤難洗  
 恨難禁俯則  
 悲痛仰則吟  
 昨夜城中霜  
 始隕誰識  
 松拍後凋心



叛國百人一首

洛東清水寺成就院乃  
住僧よりて忍向と号し  
勅を奉じて夷狄降伏  
國土安全の祈禱を修  
幕府の忌嫌よあるを  
あるを以て追捕のまき  
聞えたるが浪士平野次郎  
と共に西國に脱して  
危難をさるといふも  
舟中より身を投じて死



僧月照

船人のまき

波風のまき

あまのまき

まき

まき

まき

里見 義夫 八次郎と  
新 紀州の浪士之  
元治甲子の京戦に  
憤勇を何ういせり  
丙寅の年京洛に殺  
は復古よんかせる  
もろのうご成

もろてあま



里見 義夫

まき

まき

まき

まき

まき

まき

まき

川瀬定ハ三井寺乃  
 侍ヨリ慶応二年攝  
 河泉峰起の際一隊  
 の中ニありテ報國  
 と云ふ事ニて力百  
 方せしむ事不  
 成しテ終りし事ハ  
 是同年六月獄中  
 ニ刑せしむ

田丸ハ水戸の藩ヨリテ  
 弟ト武田藤田の両士  
 つき兵ヲ分り市川朝  
 夫の黨ト戦ハ後敦賀  
 ニ刑せしむ娘マの女  
 共ニその役ホあまのひ  
 軍中父ヨリ刑せし  
 む日の日ヨリ死す同  
 年十九才ニシテ

川瀬定  
 吾今死干國  
 素志終  
 不伸  
 已矣  
 從容去  
 九泉多知己

死出の心  
 あらま  
 牙みよ  
 あらぬ  
 殺

田丸指之志の女中  
 子

天國百人一首

俗称内藏丞号を二蕙  
又瑞草といひ自の秀家  
の未裔といひてを臣氏と  
なる土佐家の凡を学ん  
で画と云ふに一と云ふ  
る撰と云ふて丹伊中  
将大老たりしと云ふ  
せんとて関東下され獄  
におあり一年後長岡  
の藩邸に幽せんとてつ  
ちくもつと云ふと死を人  
いさめ幕府の虚威を  
張と共と云ふたを懐と

利熙ハ伊豆守利賢  
の子なり外國兼函  
館の鎮臺より郭老  
安藤對馬守信正  
國事を剛諫し  
家小自殺す世に  
利賢と云ふハあり  
あり利熙学力を詩  
文と云ふ号と有謀と云



八郎ハ長州の藩り  
あまき本名川上弥一郎  
といふ生野の役み戦  
ひちまのく妙見山り  
引ありぞれが幕  
兵あひくをせあまの  
てのがはわく自殺  
てそそり



南八郎

何そ  
珠  
おこま  
ねらうべ  
玉のこまあは  
よそにきかして

安岡正定の嘉助と  
稱し土佐の人にして  
大和の義孝よんじ  
て獄につまぐらひ幽囚  
在て一首と詠す  
むらたのふみ  
りぬれとやゆ  
彼為憲朝臣の逆旅詩  
古郷有母秋凡涙  
旅館無人暮兩魂  
と云ふよきり



花はちよま  
まよさる  
武士の  
かぐはしき  
安岡正定

久坂通武は長門の藩  
りや、通武と美助と云  
元治元年の京戦り  
國司福原と初めく  
戦ひて利あり、伊達守司  
殿下の部内ふりたり  
てまゝ、つらひし  
會津藩の運兵よ  
焼くちせ、色はがて  
道なく、たゞ、  
失われとも名、煙と  
ともに高くのりたり

柳栄は宇都宮の藩  
に、水藩の暴動  
ふる、那阿の港  
の戦ひに死せり柳栄  
とと医を以て藩り  
食と云



久坂

通武

お早ぬ

人の

つらひ

かゝる

ありて

髪さう



松本柳栄

茗も

を

うま

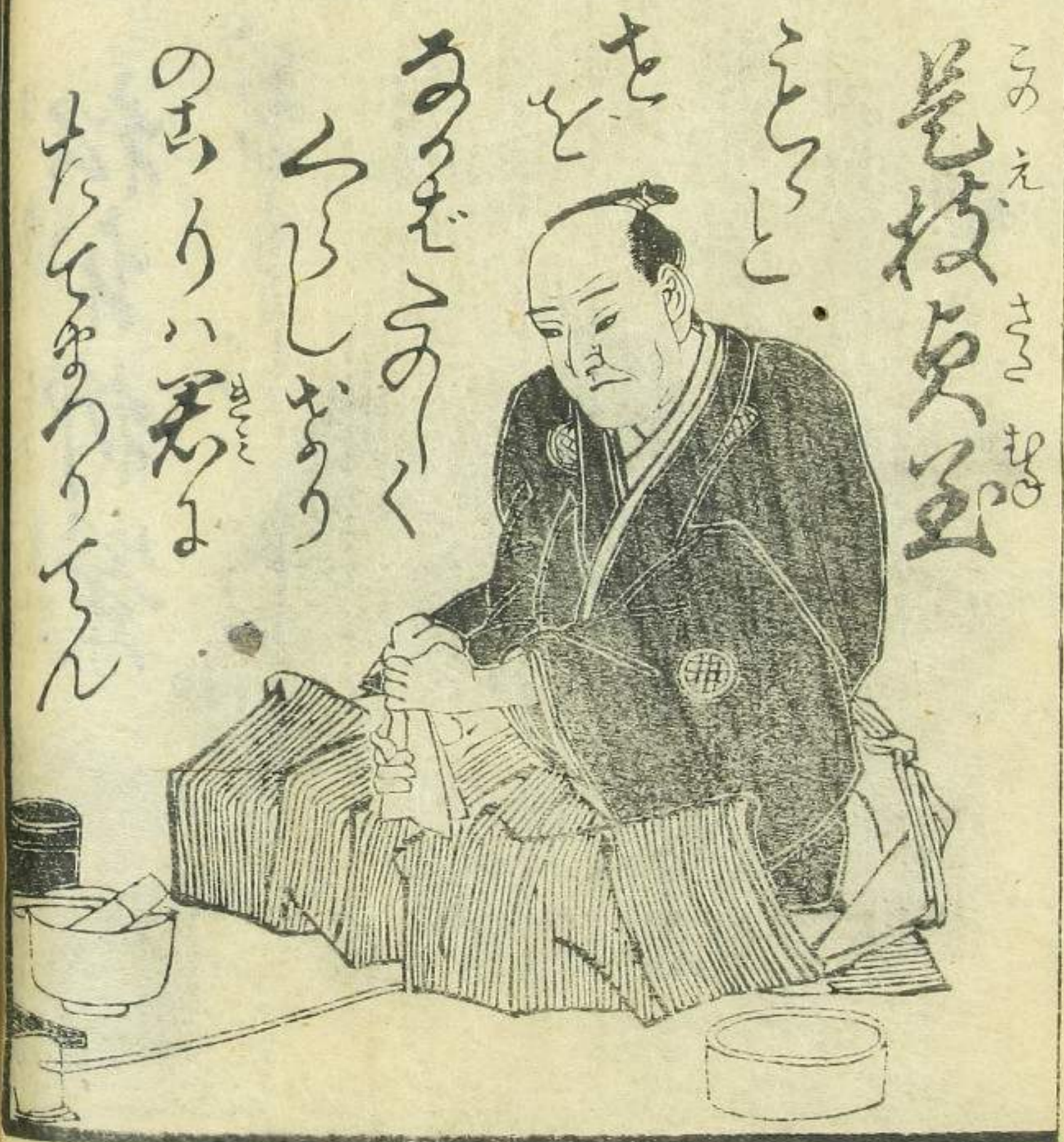
人の

あつり

あつり

世よ

是枝貞至の薩州  
の藩よりて柳右衛門  
と称せ屋久島より  
ちんぎをきてその地よ  
幽死也



是枝貞至

あつむのあく  
くじしやあり  
のありはあま  
たをあつりてん

大里正樹ハ土州の浪

士にして昇吉といふ  
元治元年七月の京  
戦に敗り天王山より  
引ありそれよりにて  
討死をりたり



大里正樹

あつむのあく  
くじしやあり  
のありはあま  
たをあつりてん



江州膳所の入りて  
生野の拳に同き  
捕りて刑せらる  
世の中のうら捕  
せらして京師より  
しつと記さるる人  
の正邪を評し  
聞てよめること

通称を存と云對及の  
藩よりを旅と好む又  
学文よ衣と好むを  
攘夷と論ぶ文久年中  
藩の獄に刑せらる死  
あつこの日名残の能を  
身つんとて致す藩  
君をして舞しむ存飲  
然とて 忍を謝し  
舞ひ終を刑まつる  
業平朝臣のつひは  
のちをふひめてい  
ふありて勇猛なる



本田素好

世の中の人

何れも

若

清

清き人の

神

ら舞



大谷正乃

つひは

及と

きけ

持

まゐる

身とを

通稱と翼と云これと對  
只の士あり如きと大徳あり  
尊攘と云強しと同藩士  
小暗殺せざるは又十七奉  
あり学問をこみんて約  
とたつとあり号と柳塘  
とのある何人のめとに  
攘夷の端とあるは云  
あまよきといふの狂句と  
せんを  
風あふむをふき  
たぐき月の雪

雁鳥取維寅ハ養巴  
と称し筑前藩あり  
元治甲子の騒乱よ  
管一々と云ふはあり  
ねいしと云ふのうこと  
獄中よ何りてよめると  
刑せしむるの口狂句と  
吟む  
砂も五粒もまきまきと  
初しと云ふ

態生一徳

前席後狼昨六今  
世途難奈  
幾浮沈  
薄才  
愧乏回  
天力  
遂得歳寒と松柏心



雁鳥取維寅

生  
学多あり  
心とあり  
及よおのめらぬ  
狗もたつと云ふ



保臣ハ久留米水天宮の祠  
官ヲ濱忠太郎又甲斐  
真翁と變名、長及の  
國司増田水と共に京師  
戰ふ始め山崎及び比叺  
薩會の兵強くして  
國司の一陣破るに當り  
獨り諸軍をくけ  
惱國司と落して天王  
山より殘兵と集め會津  
衆名の兵と血戦し終  
陣營を焼て死を五十才  
時ハ元治元年七月廿日



生本和泉守保良

繩倉

寅人

なき

小山田め

持うづそ

たのの牙の

くらをぬける

野々荒尾山大願寺の  
住僧より武田正生の隊  
中に加りて諸所を戦ひ  
終不所  
木の 本小戦死す  
永久の乱にあり僧官  
軍はあて北條よとられ  
詰問の内勅るれい身を  
控ては武士の八十ち川の深  
あへてねとらめるにけり



安と

なき

ろく

ろく

衣の捲る

仮の世よの墨の

僧未煉

水戸藩よりて武果  
と共に憤戦一同藩  
の奸黨と追んとて  
能つて幕府の兵市川  
ホの多勢にやぶられて  
那阿の港に死す

下野の國の人をて通称  
君平といふ者て國吏  
を憂ふ其説は共同  
たるもの多きを以て幕  
府は終の目ぞ獄を下  
す病て死すひえ山の歌  
い大内裡の昔をひ  
今日の造管粗るを  
憤るの云ふべし



大山幸次郎

よき心氣候  
まきり  
と  
ん  
あつきの  
ゆき振海うね



浦生秀乃実  
ひえ山  
見えたるは  
あつきの  
あつきの  
あつきの  
あつきの  
あつきの



号と耕園とついで出雲  
 の國乃浪士あううく  
 拙堂の門より又小竹  
 の家入のあそぶとらふる  
 慷慨家まで横井平郎  
 と京洛小斬るの終いと  
 うあ獄まつあれて死す  
 詩文とくし又うくとと  
 文武とくし英雄より

水藩ありて通称虎交  
 后誠之進と改む号と  
 東湖といふ博學多識  
 にしてよきとる慷慨家  
 たり源烈公の宅宛  
 ひとくこまらげつひり  
 君辺小既近と安政  
 二邦幸の大地志んの  
 後園又維とまるとして  
 公の後とて更一步大慶  
 倒して塵死す

反因百人一首



金中藤花  
 山楼  
 わるを  
 うす  
 大樞門  
 春をさし  
 しく之を  
 乃



秋の夜乃  
 藤田魁

彦九郎といふ尊王の意  
金銭の多くはて大志あり  
しう幕威後盛んをうて  
名と述ぶるの徳は腹  
して死す今も徳を刊行  
まても世にめりまこ  
近く朝廷月次の歌の  
は此正之と歌ふの  
かひはくも今上の  
あり生かしの歌も故  
べれども今日の美拳  
も又暗は相当と  
り

吉田寅次郎矩方ハ長門  
萩の人はして佐久間象山  
附て学びの道博く衆に  
先づて洋行の意布が  
其機と過ちて遂に尊  
攘を唱へ確老同部詮勝  
と撃んと本國を脱して  
上之京一変ありて己未  
の十月廿七日刑死す  
曾て文章は巧ふして  
幽囚録留魂録ホの著  
述あり今専ら世に  
行

高山正之



吉田松蔭



徳川齊昭の字の子信  
号景山謚を烈公と云  
此君総明敏智にして  
文武及び百般の技藝  
一も達せざるものなく  
重船渡来の始めより  
尊王攘夷の力一延  
庚申の八月十五日六  
歳より水戸の臥道館  
不荒せしむる曾て諸寺  
の梵鐘と廢して大砲と  
鑄造す令と下のいし  
詠せしむしハ此歌あり

近世報國百人一首 全壹冊

編輯 轉々堂藍泉  
口繪 三丁 鮮齋永濯  
肖像 五十丁 孟齋芳虎  
備書 石崎勝成  
彫工 松寄留吉



近世報國百人一首 第二編近日成刻





幸國百一

復古物語初編ヨリ三編迄

松村春浦作  
一曜齋國輝画

同

從四編至五編近刻

同同

画作

開化千字文松村春浦著

新鮮妓院論轉々堂藍泉作  
全二冊近刻

傾城深雪  
外妻拔才

二星笹の權初編二冊  
合卷

轉々堂主人作  
豊原國周画

開化一口談話一名ちやうまのい  
全一冊

梨園文明松村春浦著  
極楽快入  
抄々事銭作

新夜船松村春浦著

梨園文明松村春浦著  
極楽快入  
抄々事銭作

東京

土橋丸屋町

政栄堂

政田屋兵吉



010190509198

